

# 「真のOne Hitachi」への変革をAIで駆動するデジタルエンジニアリング

—— GlobalLogic シャンカールCEOが語る協創の未来 ——



GlobalLogic Inc.社長兼CEO  
スリニ・シャンカール

デジタルをコアにした「真のOne Hitachi」の実現をめざす日立グループにおいて、デジタルエンジニアリングの中核的存在として位置づけられるGlobalLogic。データ・デザイン・エンジニアリングの力で社会に知的インパクトをもたらし、さまざまな企業のDXとビジネスの拡大を成功に導いている。同社の強みと日立グループの一員としてのビジョンについて、2025年2月に社長兼CEOに就任したスリニヴァス(スリニ)・シャンカール氏にインタビュー。「優れた自主技術・製品の開発を通じて社会に貢献する」という日立グループの企業理念のもと、両社はシナジーにより次々とデジタルイノベーションとグローバル変革の先進事例を生み出している。「真のOne Hitachi」をめざし、デジタルで世界の変革をリードする新しい協創のかたちがある。

## 協創型

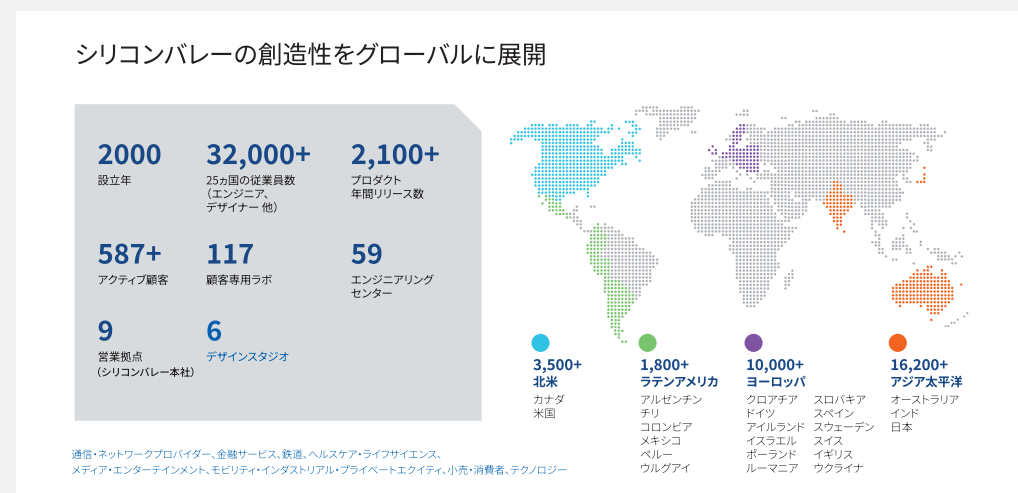
## エンジニアリングの原点

GlobalLogicは2000年に米国シリコンバレーで設立されました。創業時は世界的なテック企業をはじめとする独立系ソフトウェアベンダーの製品開発を手がけていましたが、当初から私たちが意識していたのは、単に開発を請け負う存在ではなく、お客さまと協力して製品とその価値を創造するパートナーであるということでした。

その思想は、のちに「ラボモデル」へと発展します。これは、お客さま企業の中に専用チームを設置し、「ゼロディスタンス(お客さまとの距離ゼロ)」のアプローチで長期的にお客さまと価値を「協創」するというスキームです。当社のエンジニアたちはお客さまの開発組織の一部として機能し、お客さまの戦略や企業文化を深く理解した上

で仕事にあたります。この協創スキームがGlobalLogicの独自性であり、シリコンバレーの多くのテックノロジー企業から高く評価されてきた要因の一つです。創業から数年後、通信や医療、

モビリティ、メディアなどの分野を中心に、産業界はSDx(Software Defined anything:あらゆるものがソフトウェアで定義される)時代へと急速に移行していきました。その変化を追い風に、私たち



はデジタルエンジニアリングのリーディングカンパニーへと成長。現在、世界25カ国に約3万2000人の従業員を擁し、約600社のお客さまと共に事業を展開しています。またAIのリーディングカンパニーとしても知られており、全社員を対象にAIトレーニングを実施し、組織全体でのAI活用を積極的に推進しているほか、2000人のAIデータエンジニアとエキスパートを含む、16000人のAI人材を擁し、500件以上の製品エンジニアリング実績を誇っています。業界をリードする専門知識と能力は、ISGプロバイダー「ecs」から生成AIサービスのリーダーとして2024年に認定されるなど、世界的に高い評価を得ています。

## 日立グループとの ケイパビリティ融合

2021年、私たちは日立グループの一員となりました。当時、GlobalLogicの社名は日本では

## スリニ・シャンカール (Srini Shankar)

GlobalLogic 社長兼CEO。2023年にGlobalLogic入社、最高事業責任者およびグローバルインダストリー部門の責任者として、業界別事業部門におけるGo-to-Market戦略の加速を主導。2025年2月より現職。約30年にわたるデジタルビジネスとリーダーシップの経験を生かし、企業ビジョンの策定から事業戦略の実行、グローバル組織の運営まで、全体を統括するリーダーとして同社の成長と変革を牽引している。

Birla Institute of Technologyで工学の学士号を、Indian Institute of Managementで経営学修士号(MBA)を取得。GlobalLogic入社以前はCognizantおよびInfosysにて複数の重要なリーダー職を歴任し、市場の拡大と持続的な成長に貢献してきた。現在は家族とともにニュージャージーに在住。オフにはテニスや歴史書、旅行を楽しむ。



加速するものです。

私がGlobalLogicに入社したのは2023年のことですが、私たちと日立、それぞれのこれまでの歩みと、こうした融合の意味にとっても魅力を感じました。そして2025年2月に社長兼CEOに就任したときには、革新的で創造的なGlobalLogicを率いることを誇りに思うと同時に、日立グループの一員として、社会や地球環境に大きな影響をもたらすデジタル製品・サービスのデザインやエンジニアリングを通じてお客さまの変革を支援し、日立が注力する社会イノベーションの実現に取り組めることに大きな高揚感を覚えました。

## Engineering Impact — 社会に知的インパクトをもたらすデジタルエンジニアリング

ここで、もう少し私たちの強みについて紹介しておきましょう。GlobalLogicが掲げる「Engineering Impact」という企業メッセージ

ほとんど知られていなかったため、日立がこの買収に巨額の投資を行ったことは大きな話題となりました。ただ注目していただきたいのは金銭的なことではなく、このM&Aが日立の社会イノベーションを次の段階に進めるためのケイパビリティの融合を意味していたということです。

日立は110年以上の歴史を持ち、エネルギー、モビリティ、社会インフラ、産業などの領域で蓄積してきたOT(Operational Technology)プロダクト、そしてITという3つの強みを活用したLumada事業をグローバルに展開しています。Lumada事業は、最新のデジタル技術によりお客さまのデータから価値を創出し、ユーザーエクスペリエンスの設計から製品やサービスの開発・改善に至るビジネス創出プロセスやデジタルイノベーションをEnd-to-Endで支援する協創スキームを特長としています。GlobalLogicの協創アプローチもまた、お客さまのデジタルジャーニーをEnd-to-Endで支援する点を特長とします。デザ

は、データ、デザイン、エンジニアリングを駆使しながら最先端テクノロジーを活用するデジタルエンジニアリングにより、社会に知的インパクトをもたらし、お客さまのデジタルトランスフォーメーション(DX)とビジネスの拡大を成功に導くという姿勢を表しています。

このデジタルエンジニアリングは、次の3つの要素から成り立っています。1つ目は「Designed for Desirability(人を惹きつけるデザイン)」——技術起点ではなく、人々が「使いたい」と感じる体験を起点としたエクスペリエンスデザインの追求です。私たちの戦略デザイン部門であるMethodが、エクスペリエンスデザインやサービスデザインを融合することで、製品の機能性だけでなく、社会的背景や感情的満足をふまえた総合的な体験価値をデザインするとともに、お客さまのビジネスの将来像を可視化します。

2つ目は「Engineered for Excellence(卓越したエンジニアリング)」——生み出されたアイデア

イン思考でユーザーエクスペリエンスを設計するデザイナー、デジタル戦略を策定するアドバイザー、豊富な専門知識を持ち短期間にプロダクトを開発・実装するエンジニア、Aを活用したデータ分析によりインサイトを獲得するデータサイエンティストなどのプロフェッショナル人材が「ラボ」としてチームを組み、グローバル規模での協創を通じてお客さまのデジタルイノベーションを加速、新たなデジタル製品やユーザーエクスペリエンスの開発を支援しています。

## 日立とGlobalLogic、協創アプローチの符合

つまり、GlobalLogicのアプローチはLumadaの協創アプローチと合致し、補完するものだと言えます。日立とGlobalLogicの融合は、これまで日立がLumadaを通じて蓄積してきたデジタルソリューションのグローバル展開を加速し、お客さまや社会が直面する

やデザインをCloud、つまり組込み制御からIoT、AI、データ解析、クラウド連携などのすべてのレイヤーにおいて最新の技術を駆使し、実現するための高度なエンジニアリングです。

3つ目が「Curated for Intelligence(知的洞察の創出)」——システム導入後にデータを収集し、Aを活用した分析を行い、データを単なる情報ではなく「洞察」に変換、お客さまを知的に進化する組織へと導きます。このデータとAによる知的価値創出こそがGlobalLogicの真価であり、LLM(大規模言語モデル)やAIGバナンス、責任あるA実装などを含む最新の知見をお客さまへ積極的に提供しています。

## アイデアをビジネス価値へとつなげるGlobalLogicVelocity AI

GlobalLogicがめざすのは、Aが人間に取って代わる社会では

課題の解決をめざす社会イノベーション事業の強化につながっています。さらに、日立がめざす「真のOne Hitachi」——エナジー、モビリティ、コネクティビティ、リリース、デジタルシステム&サービスの4セクターで展開する日立グループの各事業を、デジタルをコアに強く連携させ、日立ならではの価値を創出する——その実現を



なくAが人間の創造性を拡張する社会、デジタルと人間の創造性が共進化する社会です。Aは目的ではなく、社会をより賢く、より持続可能にする手段であると私たちは考えています。

しかし、多くの企業ではAを





効果的に導入し、安全に使いこなすことに苦戦しています。そこで私たちは企業のAI主導による製品開発と業務効率化、迅速な意思決定を支援するため、AI、デジタル技術と専門家の知識を包括的に活用するサービスオファリングスイート「Velocity AI」を開発、2025年3月にローンチしました。

Velocity AIは、既存のAIモデルやクラウドサービスを束ね、セキュリティや法的リスクを管理しながらAI活用を促進する「Platform of Platforms」というプラットフォームアーキテクチャーに基づいて構築されています。ソフトウェア開発のライフサイクル全体にわたってAIを活用する「AI-powered SDLC(Software Development Life Cycle)」と業務効率と創造性の向上をめざした企業のAI活用・導入を支援する「AI-powered Enterprise」という2つの主要コンポーネントで構成され、AIを安全に使いこなし、製品やサービス、オペレーション全体で持続的な価値を生み出す仕組みを提供します。

また、日立グループはケイパビリティ強化、フットプリント拡大をめざしてAI関連企業のM&Aも推進しています。直近では2025年9月、ドイツに本社を置くAIコンサルティングファームのSynventを買収し、GlobalLogicの100%子会社とすることを決定しました。このM&Aは、エージェンティックAI（設定された目標を達成するために自律的にふるまうAI）やフィジカルAI（現実の物理世界と直接的に相互作用しながら自律的に行動するAI）の開発を加速し、それらを活用してお客さまや社会の課題解決をめざす日立のソリューション群「HMAX」の展開強化を目的としています。

組を提供します。私たちが行ったこれまでの検証では、Velocity AIを導入したクライアント企業では、組織全体の生産性が30%向上、製品・サービスの開発期間25%短縮、運用コスト20%削減といった成果が得られています。Velocity AIは、現在、日立のソフトウェア開発などへの活用が進んでいます。

## One Hitachiのデジタルトランスフォーメーション

ここまで述べてきたようなGlobalLogicのケイパビリティは、「真のOne Hitachi」によるDXを推進する触媒としての力を発揮しています。例えば、日立レールが、2025年9月に米国メリーランド州ハイガーズタウンに開設した新工場において、製造プロセスの効率化、作業効率と作業員の安全性のさらなる向上など、次世代スマートマニユファクチャリングの実現に向けたグループ一体の共同

プロジェクトが進められており、その中でGlobalLogicは重要な役割を担っています。

また、日立エナジーと設備メンテナンスの高度化などエネルギーソリューションの変革に向けた取り組みを進めるほか、日立ハイテクや、Flexware Innovation（本社：アメリカ）、日立アクアテック（本社：シンガポール）をはじめとしたコネクティブインダストリーズセクターの各社と、製造プロセスのDX化や、ユーザー体験を向上するアプリケーションの高度化などさまざまな取り組みを進めています。

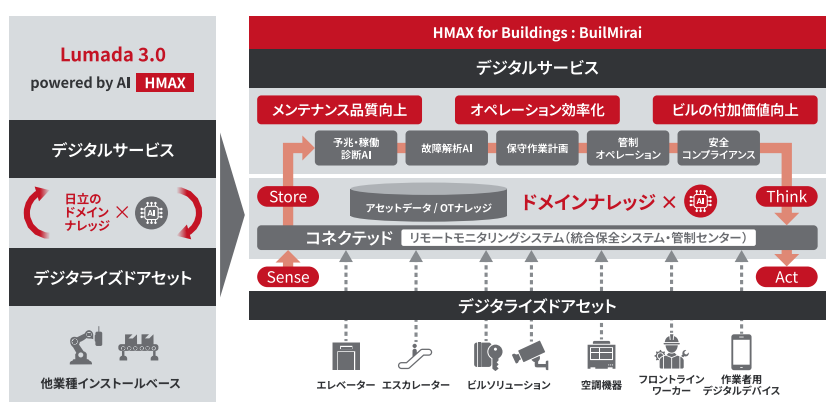
GlobalLogicは、このほかにも

多くの協創事例を手掛けており、その直近の例としていくつか国内のOne Hitachi事例をご紹介します。

## BuilMirai — ビルの価値を高める統合デジタルサービス

日立ビルシステムが提供する「BuilMirai」は、ビル管理の効率化や業務品質の向上、利用者の快適性向上などを実現するLumadaのデジタルサービスです。GlobalLogicはこの開発に参加し、規模の拡大・縮小などにも柔軟に対応できるas a Service型の「HMAX for Buildings : BuilMirai」と発展させました。as a Service型BuilMiraiは2025年10月から提供を開始しており、今後、順次サービスを拡充していく計画です。

GlobalLogicがクラウドの設計とUXデザインを主導したこのサービスでは、昇降機をはじめとするビルのさまざまな機器の運用データ、ビルを利用する人々の



デジタル資産にナレッジとAIを掛け合わせてデジタルサービスとして価値を提供するHMAX for Buildings: BuilMirai

活動データを収集、ビル管理のドメインナレッジと合わせてクラウド上で分析することにより、メンテナンス品質とエネルギー効率の向上、オペレーションの最適化を実現します。それらの成果は、ビルの居住者や利用者のウェルビーイングとビルの付加価値向上につながります。



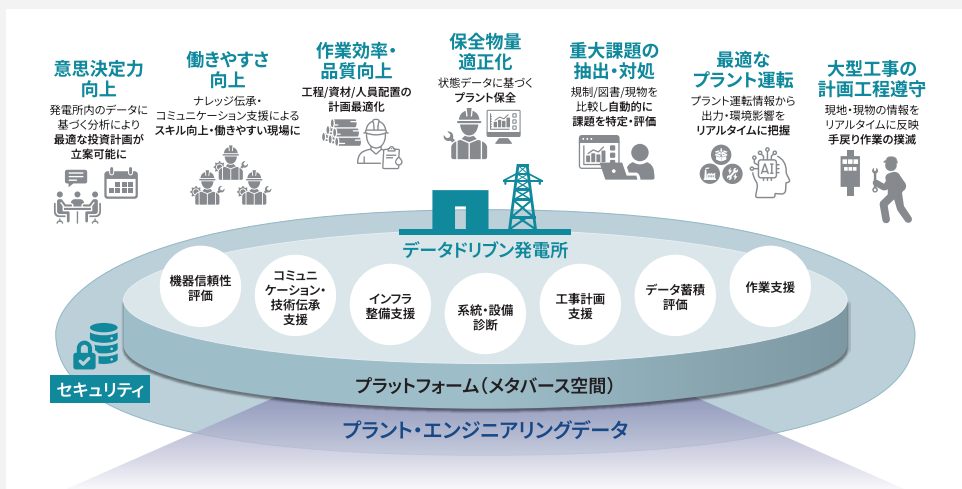
## 原子力メタベース プラットフォーム—— データドリブン 原子力発電所をめざす

原子力ビジネスユニットとGlobalLogicが共同開発している「原子力メタベースプラットフォーム」は、原子力発電所をメタベース上に再現し、既存発電所の安全対策工事や、今後の新規建設、保全業務、廃止措置などにおいて、設計から現場施工までの作業の効率化を支援します。認証された複数のエンジニアがアバターとなって同時にメタベース空間に入り、現場状況の確認や寸法測定、オンライン会議などを行えるほか、AIを活用した設計図書の検査機能などにより迅速な意思決定を支援します。

今後、設備状態を評価するAsset Performance Managementや資産管理を実現するEnterprise Asset Managementと連携し、メタ

ベースを現場データ活用プラットフォームへ進化させ、顧客プラントの投資最適化と稼働率向上を支援します。

この取り組みにより、データに基づく発電所運営を実現し、データドリブン発電所の構築をめざします。



## 建設承認メタベース—— 業務スタイルを変革する 生産プロセスのDX

大成建設と、日立コンサルティング、GlobalLogic Japan、日立ソリューションズは、建設承認プロセスをメタベース上で可視化する「建設承認メタベース—CONSTRUCTION CONTRACT QUEST」を共同開発しました。

このシステムでは、建築物の意匠・構造・設備などのデジタルデータが統合されたBIM (Building Information Modeling) を基にメタベース上に3D建物空間を構築、ゲーミフィケーションも取り入れ、アバターを使って内部を確認できるようにしました。さらに、生成AIを利用して仮想空間で検証した確認から承認に至るまでの議事録などを記録、保管することも可能です。あらゆる情報をデジタル空間で一元管理することにより、従来の建設業における働き方を変え、データや

実装することに貢献しました。

このプロジェクトは2025年7月に、一般社団法人日本デジタルトランスフォーメーション推進協会が主催する「日本DX大賞2025 奨励賞」を受賞したほか、11月にはXRコンソーシアムが主催する「AI×Rクリエイティブアワード法人部門優秀賞」を受賞し、建設業界のビジネスモデルに変革をもたらすものとして注目されています。

## 日立グループの一員として、 協創文化で世界に変革を

日立グループは、長年にわたり社会インフラを支える中で信頼性や継続性を培ってきました。一方、GlobalLogicがシリコンバレーで磨いてきたのは、変化を前提としたスピードと創造性です。両者の融合は、日立グループに「安定と変革」という一見相反する要素を共存させる新しいビジネスモデルを

もたらし、グローバルな成長を加速させています。

GlobalLogicのデザインシンキングやアジャイル開発の技術と文化は、日立グループ各社、各事業部門に広く浸透し始めています。アイデアの初期段階からお客さまやエンドユーザーを巻き込み、プロトタイプを通じて価値を検証するという考え方は、プロダクトを中心としてきた日立の仕事の進め方を根底から変えつつあります。お

客さまのそばで、ニーズや課題を深く理解して価値創出につなげるGlobalLogicのゼロディスタンスのアプローチと、日立の社会課題起点の発想が融合したことにより、「協創」は戦略ではなく「文化」になりつつあると言えるでしょう。

「デジタルセントリック企業をめざす日立」がGlobalLogicに期待しているのは、日立全体のDXを推進する旗手となること、そして日立グ

AIと共に未来へつなぐ働き方への変革を支援します。

開発には世界水準の開発力を持つGlobalLogicのインドチームも参画。現場のニーズを短期間で

グループの組織文化を変えるきっかけとなることだと考えています。GlobalLogicのインドや東欧の人財を日本のシステム開発に投入するインソーシングも拡大しており、日本のデジタル人材の不足を補うことも期待されています。

私たちは、「イノベーションで社会の困難な課題を解決する」という日立のビジョンを共有できることを誇りに思います。そして、私たちはAIのリーディングカンパニーとして、AI、特に生成AIやエージェンティックAI、フィジカルAIの活用を通じて、グローバル規模でのデジタルイノベーションをさらに加速させる力を持っています。これにより、単なる効率化やデジタル化にとどまらず、社会に対して具体的に持続的な変革のインパクトを生み出すことが可能になります。GlobalLogicが「真のOne Hitachi」を推進する触媒の役割を果たし、日立グループ全体のケイパビリティを結集して共にEnd-to-EndのDXを実現していくことは、世界に変革の力をもたらすと確信しています。